

「キリストによる平和」エペソ2章11-22節

パウロが今日の箇所を取り扱っているテーマはユダヤ人と異邦人の融合統一の問題です。パウロはここで、キリストによって救われたクリスチャンはユダヤ人とか異邦人といった民族の違いを越えてキリストにあって一つとされた神の家族であると語りたかったのです。何故なら、このユダヤ人と異邦人の間にはキリストを信じて中々乗り越えられない確執や偏見があったからであります。そのためユダヤ人は彼ら異邦人がキリストを信じて神の救いにあずかるなんてことは考えもしなかったのです。

そんなユダヤ人と異邦人の民族的背景を知っているパウロは、ここでエペソ教会の異邦人クリスチャンたちに対して、「ですから、思い出してください。」と語り始めます。

それは異邦人たちがその悲惨な罪の状態からどのようにしてキリストによって救われたかということ思い出ささいと言うのです。何故なら、教会の中で何かの問題が起こる時というのは、このキリストによる一方的な救いの恵みを忘れて、自分を神のような立場に置いて他の人をさばく時だからです。しかし自分の救われる前の罪の悲惨な状態を思い起こせば、自分の中には誇れる義など何一つなく、人をさばく資格などないことがわかるからであります。そのためパウロは11節、12節でまずエペソ人たちがキリストを信じる前はどのような霊的状态だったかを示しています。パウロはここで、「あなたがたはかつて、肉においては異邦人でした。」と語ることによって、彼らが神の契約の民ではなかったことを明らかにしているのです。その結果、異邦人は「この世にあっては望みもなく、神もない者たちでした。」と語るのです。パウロから言えば、偶像の神々と言うのは人間が勝手に作り出した神々であって実際には存在しないのです。ところがそんな絶望の中を歩んでいた異邦人に対してパウロは13節で、「しかし」と語ります。それはそんな神さまからは見放されたとも思えた彼らが、今や、キリストの血によって近い者となったと言うのです。このキリストの血というのは言うまでもなく、キリストが十字架上で流された血のことです。それはキリストが十字架で流された血によって与えられる神さまの罪の赦し、罪からの救いを示しています。これは自分たちの罪のゆえに神から遠かった異邦人が、今やキリストの血によって罪が赦されただけでなく、神に近づくことができるようになったということです。

そして、そのキリストによって与えられた救いの内容を示すためにパウロは14節で、「実に、キリストこそ私たちの平和です。」と語るのです。

ここでパウロが語っている平和とは二つの意味があります。一つは私たちと神との和解であり、平和であります。キリストは罪のゆえに、私たちと神との間にあった隔ての壁である敵意を打ち壊し、様々な規定から成る戒めの律法を廃棄されたと言うのです。私たち異邦人は、かつては聖書の神を知らず、神から離れ、神に対して敵意を抱き、悪い行いの中にありました。しかしイエス・キリストが十字架で流された血によって神との和解が与えられ、平和がもたらされたのです（16節）。私たち異邦人は神からもキリストの契約からも遠く離れていた者でありましたが、今はキリストの血によって神に近づくことのできる者とされたのであります（18節）。しかしパウロがここで語ろうとしていることは、この神との和解だけではありません。それはパウロが14節以降で語っている「私たち二つのもの」とはユダヤ人と異邦人のことを指しているからです。そして先ほどもお話したように、ユダヤ人と異邦人との間には隔ての壁があり、敵意がありました。実はエルサレム神殿の宮の中に実際に「隔ての壁」というものがあり、異邦人の改宗者はユダヤ人の礼拝する場所に入ることができませんでした。入ると殺されたのです。しかしこの実際の隔ての壁よりももっと高く、

もっと厚い、ユダヤ人と異邦人の心の中に存在する壁はすでにキリストの十字架によって打ち壊されたのであるとパウロは語るのです。それはキリストが十字架で流された血によって新しい契約が成就し、罪の贖いが完成し、様々な規定から成る戒めの律法が廃棄されたからでした。このようにイエス・キリストは今までのユダヤ人と異邦人との両者の間に存在する差別や確執や敵意を取り払って下さったと言うのです。しかしそれは、まずキリストが十字架によって私たち人間と神との間に存在していた敵意を打ち壊し、和解をもたらしてくれたからであります。そしてこの神との和解、平和はまた、ユダヤ人と異邦人という民族の壁、両者の間に存在する敵意を取り除き、平和を与えて下さったと言うのです。だから「キリストこそ私たちの平和である。」と言うのです。それはこの神と人との和解があって初めて人と人との和解ももたらされるからです。この順番はとても大切であります。このようにしてキリストによって新しく造られた者たちの集まり、それが教会であるとパウロは語るのです。

しかしこのパウロによるエペソ人への手紙はこの時代の異邦人クリスチャンとユダヤ人クリスチャンたちの間に何らかの確執や対立があったことを匂わせています。そしてパウロはこの手紙を通してその両者の間にあった確執、分断をキリストによってもたらされた救いを指し示すことによって乗り越えさせようとしているのであります。しかし過去のキリスト教会の歴史や現代の教会の姿を見る時に、残念ながら、それらの民族や人種間の分断や確執、対立を乗り越えることのできない現実を見ることができます。いや民族や人種などと大上段に構えずとも、同じ日本人の教会の中でさえも一つとは言えない教会の現実直面させられることがあります。私たちはキリスト・イエスにあって新しい人に造り変えられたにもかかわらず、いや神の御霊が与えられ、神の家族とされているにもかかわらず、平和の内に、赦し合い、愛し合って生きることができていない現実があるのです。

私たちはこのキリストによって滅ぼされている敵意と教会の中に現実に残存する確執をどう捉えるべきでしょうか。このパウロの手紙はまさに、この両者の緊張関係の中で語られているのであります。それは私たちがキリストを信じ、キリストによって罪を赦されているも罪はなくなり私たちの心の中にある罪が頭をもたげてきて人間関係の平和を破壊するということがあるからです。あるいは私たちの過去の癒されていない傷やトラウマが私たちの心の中にある罪を刺激して問題をもたらすとも言われています。しかし、このユダヤ人と異邦人との間にあった確執は、彼らが小さい頃から教え込まれ、植え付けられて来た宗教的価値観や生活習慣が簡単に変えられないことからきております。それほど深い所で私たちが育った環境とか文化や価値観というのは影響を与えており、簡単に変えることができないのであります。そしてそのようなある意味、信仰とは違う部分での民族的、文化的違いが対立や摩擦軋轢を生み出すことがあるのです。私たちキリスト者はイエス・キリストを信じたからといってその時から完全な人間になったわけではないからです。パウロはエペソ教会の中にあったユダヤ人キリスト者と異邦人キリスト者の間にあった確執や敵意を知っていました。だからこそ、ここで彼らに自分たちが罪の中からキリストによって救われたこと、新しい人に造られたこと、神の家族とされたことを思い出して下さいと語っているのです。

それはエペソ教会が人種の壁、民族の壁を越えて、キリスト・イエスを基にして互いに組み合わされ、成長し、主にある聖なる宮となることを願っていたからです。私たちは神の家族とされました。しかし一度家族になっても最初からすべてがうまくいくわけでもありません。問題は必ず起こってきます。私たちは「完成した神の家族」ではなく「成長途上にある神の家族」なのです。問題が起こり、不協和音も生まれます。しかし平和をもたらして下さいた神が、その礎石であるキリストがその教会の土台として働き続けておられることを信じて歩み続けるとき、希望は決して失われることはないのです。